

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

3
Vol.45 No.3 MARCH
2022

食物アレルギーのある 子どものケア

食事を通して成長・発達の
プロセスを支援しよう

連載

もっと知ろう！障害がある子どもと
家族のくらしの支え方
在宅生活における支援



ヘルス出版

連載

心が歌えば、世界が揺れる♪♪♪

佐藤聰美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第11回 ピアノを上達させたければ

「おっと、あと三歩でおもちゃに手が届きそうなのに」と固唾を飲んで、見守る保育園の先生。寝ていた乳児が歩けるようになるのを見届けるのは、乳児クラスを担当する醍醐味だろう。1歳のかおりちゃんは、ようやくおもちゃの近くまで来られたのに、じれったいよちよち歩きを放棄して、超高速のハイハイに切り替えた。目を見張るスピードである。おかげで、友だちに奪われる前におもちゃを独占できた。

保育園の先生は、かおりちゃんにひとり歩きを促したかった。しかし、彼女はすぐにハイハイをしてしまう、と研修会で発表した。対応についてまずは先生同士で協議してもらうと、「先生が横について一緒に飽きるまでハイハイをする」という意見や、「手足を持って、一緒に動かし方を練習する」という考えも出た。先生たちの実体験からの議論もあり、自然に熱がこもる。

その後に、筆者はおもむろに「かおりちゃんは歩きたいのでしょうか?」と質問をした。すると、思考が鋭い先生は「あー、そういうことですか。私たちは歩かせよう、歩かせようとしているけれども、本人はそもそも歩くつもりがないということですか?」と応えた。筆者は「そうかもしれません。おもちゃを早く取りに行きたいという欲求。それを叶えてくれるのがハ

イハイ。欲求とハイハイがつながっていて、歩行は宙に浮いています。何にも結びついていないのです。欲求が歩行と結びついたとき、歩き始めると思いますよ」と話した。

臨床心理学の基本的なスキルは観察である。ただし漠然と見るのではなく、どのような欲求をどのような行動で解消しているのかを観察することが重要である。それにより、少なくとも欲求のほうを修正すべきか、行動のほうを修正すべきか、あるいは両方なのかの仮説が立てられる。

ほかの先生が「それでは、歩ける距離におもちゃを移動させて、歩くことで欲求を満たしていくべきでしょうか」と的確な回答をした。欲求と行動が結びつきやすくなるように、環境を調整するのである。さすがプロフェッショナルだと感じ入った。

かくいう筆者も、患者さんと出会わなければ、臨床をしたり、研究をしたり、こうしてエッセイを書くことにはならなかつたであろう。電車好きの我が子も、駅の名前が読めるようになりたい一心で、漢字練習に精を出している。同じように「ピアノを上達させたければ、自分で弾きたいと思わせる曲を聞かせること」が最も早道であり、それはつまり欲求の喚起なのである。

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。富山県出身。米国の Bellevue Community College を卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。小児がんの子どもと家族を支えるエゴノキクラブを主宰。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。